

問答歌」であろう。また、『万葉集』中においても異色の歌であり、他に「貧窮」を詠んだ歌は見られない。この歌は、筑前国国守であった憶良が大宰府長官の大伴旅人と共に九州で多くの歌を詠み、その任期が終えて後に、京に帰って来てからの作品と考えられる。今回は、「貧窮問答歌」について、次のような方面から考えていきたい。

一 用字―「モ（毛・母）」の表記の仕方。

付・語彙―「ア」と「ワ」。

二 構成―長歌の構成はどうなっているか。

三 時代―天平四年前後の時代背景。

四 中国情勢―主に憶良渡唐期の情勢。

五 謹上相手―諸説の整理。

以上五点から、憶良は何故「貧窮問答歌」を詠んだのか、考えてみたい。

漱石と子規の漢詩についての一考察

―漢詩の応酬による交遊―

博士前期課程 二年 徐 前

漱石と子規は同じく幼い頃から漢文学に親しい文学者である。両者はともに中国古典から深い影響を受け、漢文の教養を持ち、生来詩人的素質に恵まれているが、ついに漢詩を以て世に処することがなかったのである。子規は十二才から既に漢詩を作り始め、詠んだ漢詩は約二千首にのぼるといわれる。生前自選した一冊の『漢詩稿』

（六百二十二首）が残されている。それに対して、漱石が漢詩を作り始めた時期は子規より遅かったようで、作品数も少なく二百八首しかない。しかし、何れにしても才気は溢れているもので、しかも吉川幸次郎によって評価されたように「例外的に思索者の詩」である。漢詩は漱石と子規の文芸の重要構成部分で、余技として看過してはならないものである。

漱石の漢詩を作る意欲は子規の刺激を受けて初めて出てきたといわれる。漱石が明治三十三年にイギリス留学するまでに作った漢詩は全部で七十六首である。その中、子規との交遊に関わったもの『七艸集』に評する九首、『木屑録』十四首、『函山雜詠』八首、次韻唱和など）は大半を占めるのである。子規の漢詩には漱石に関係するものもかなりある。

漱石と子規の漢詩は同じ趣旨のものもあれば、違った志向などを示すものも多い。ここで、両者の交遊時代の漢詩に着目し、両者の題材や内容上の特色などの異同を探索しながら、比較の視点から漱石と子規の漢詩人としての一側面を考察してみたい。

『道草』の文体・表現効果についての考察

博士前期課程 二年 三 浦 高 人

小宮豊隆の「漱石は高い所からそれを見下ろしつつ、その健三の善い所と悪い所とをそれが他人でもあるように、公平に「私」なしに、指摘する。」（『漱石の芸術』S17・12・9 岩波書店）以来、『道草』の表現方法（文体）の評価は、公平かつ無私的であるとして

確立してしまっている感がある。しかし大嶋仁『道草』における作者と主人公の関係（『講座夏目漱石』第四巻 S57・2 有斐閣）では、「作者と主人公」は「融合から分離へ、分離から融合へと、その関係は目まぐるしく変化している」ことを、マクレランの英訳文と比較分析することを通じて指摘している。

英語圏と日本との文化の相違その他の問題もあるだろうが、この論文は、それまでの『道草』論の画一的な展開に一石を投ずる問題を含んでいるのではないだろうか。

それを受けて、今発表では、『道草』の文体、表現効果について考察していきたい。

《中国学》

『駱駝祥子』をめぐる

博士後期課程 二年 花城 可裕

老舎の代表作である『駱駝祥子』はこれまで他の作家の他の作品同様、社会主義リアリズムの文芸理論を図式的に運用することで論ぜられてきた憾みがある。今日においてもまだその旧套を脱していない嫌いがあるのみならず、政治的な制約を受けることのないわが国においてもまたその傾向があることは否めない。しかしながら、社会主義リアリズムの文芸理論は数ある評価基準の一つに過ぎない。ある特定の「主義」に拠って作品を語るのではなく、作品中に存在する「問題」をこそ研究するべきであろう。「祥子は何故『革命』しないのか」などと言っても詮方のないことである。

さて、老舎は『駱駝祥子』において、非常に判りやすいかたちで、「病める社会」の批判と「個人主義」の批判をしている。そしてこの二つの批判こそがこの小説の主題であることは異論のないところである。しかしながら、一見自明のことに見えるためか、ここで老舎が用いている「個人主義」なる語の意味が十全に論ぜられたことはない。ために、老舎がこの所謂「個人主義」を批判することで何を主張しているかは未だ不明瞭のままである。本発表はこの問題を端緒として『駱駝祥子』の主題をめぐる二、三の問題を考察してこの小説の新解釈を試みようとするものである。

今年は恰度、『駱駝祥子』問世六十周年の歳に当たっている。この発表が一つの切っ掛けとなって、「華甲」を迎えた『駱駝祥子』が、これまでの硬直した読まれ方を脱して新たな生命を得ることができたらば、と思う。

中国近世における博文約礼解と知行論

東洋学研究所副手 中根 公雄

「博文・約礼」はもとより『論語』の語であるが、朱熹は『集注』で、「君子の学は其の博からんことを欲す、故に文に於て考へざる」と無し。守るに其の要なるを欲す、故に其の動くに必ず礼を以てす」（雍也篇）、「博文約礼は教の序なり。言ふところは夫子の道は高妙と雖も、人に教ふるに序有るなり」（子罕篇）と解釈して、實際的に学による知識の獲得と礼による知識のひきしめという、具体的な知や功夫の段階を主張する。更に侯仲良の語を用いて「我を博むるに文